

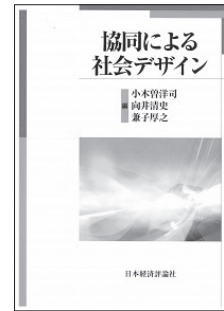
書評 02

小木曾 洋司・向井 清史・兼子厚之 著文 / 編集

『協同による社会デザイン』

日本評論社 / 2019 年 4 月刊 / 378 ページ / 3600 円 + 税
ISBN 978-4-8188-2528-4

評者：大高 研道
明治大学教授



本書は東海 3 県をエリアとする地域と協同の研究センターの「生協の（未来の）あり方研究会」による前著『未来を拓く協同の社会システム』（2013 年発行）の続編である。

経済のグローバル化と福祉国家システムの再編が急激に進む中、1990 年代以降の協同組合陣営は「自己改革」をキーワードとして様々な改革を行ってきた。本書は、その核となるのが組合員参画によるガバナンスのあり方であるという問題意識（序章）を保持しつつ、第 1 部「新しい生協像への視座」（第 1～6 章）では多領域の研究者による理論編、第 2 部「東海における生協の今」（I～V）は実践家による論考および補論「協同組合と文化」によって構成されている。

新しい生協像への視座

第 1 章「地域社会の当事者性を創る」（小木曾洋司）は、ICA 第 7 原則「地域社会への関与」は地域社会への「貢献」ではないことを指摘したうえで、地域住民とともに創り出す生協運動に今後の展望を見出す。地縁的なコミュニティと個の集合体であるアソシエーションを二元的・対立的に捉えてきたこれまでの共同・協同論を超えて、そこに住む暮らしの中にアソシエーション（協同組合）を再定位する視点は示唆的であり、以後の論考における共通基盤となっている。第 2 章「「他者志向的事業体」として生協を見直す」（向井清史）は、生協を単

なる流通事業体としてではなく、「他者志向的事業体」（共通感覚の醸成、相互了解の成立を目的とする立場に立つて行為（事業）を行うこと）として捉え直すことによって、社会運動解決主体としての可能性を提示する。その考察は単なる提起にとどまらず、生協が他者志向的事業体たる根拠にまで及び、生協が介護福祉や倫理的消費の領域に関わる必然性を説得的に論じている。第 3 章「地域福祉型生協の展開と可能性－協同組合は社会運動を担えるのか」（朝倉美江）は、社会運動を展開する生協を「地域福祉型生協」と捉え、地域福祉の本質には、住民主体の原則や福祉コミュニティの創造といった運動的機能があると明快に論じる。コミュニティ・オーガニゼーションやコミュニティワークからのアプローチは、地域福祉活動に取り組む生協の意味・意義を省察的に捉え直す多くのヒントを与えてくれるであろう。第 4 章「「持続可能な消費」によるフェアトレード」（近藤充代）では、個人の志向や嗜好に依存する「倫理的消費」のみならず、国内の生産・流通を含めた包括的な社会関係性を踏まえた「持続可能な消費」という視点からフェアトレードの意味と可能性を論じる。消費とは他人を支えるということであると指摘する本章は、持続可能な消費、そして（地域）社会の実現にむけた生協の存在意義を再確認させてくれる。第 5 章「格差社会における生協事業」（加賀美太記）は、日本経済の構造変化が生協に与える影響につい

て、経済・消費・流通の諸要素から説得的に論じる。そのうえで、「貧しいが故の不利益」を克服するための事業を展開する生協に求められる「挑戦」について、CO・OP 商品、店舗事業、無店舗事業といった多面的な角度から考察を加えている。第6章「時代の要請に応える生協運動への期待と提言」(兼子厚之)は、他企業との同質化競争次元を抜け出し、生協らしい固有の価値創出に向けた提言(8つ)を批判的・創造的に論じている。

東海における生協の今

第2部では、東海地区の生協事業・運動の到達点とともに今日の状況に対応するさまざまな取り組みや思いが綴られている。

I. 「『愛知の生協のグランドデザイン』から未来を考える」(磯村隆樹)では、めいきん生協とみかわ市民生協が合併してコープあいちが誕生した2010年3月に先駆けて両生協が行った協同調査・研究成果「愛知のグランドデザイン」(2006年3月)をあらためて振り返ったうえで、その原点と目指すべき方向について述べる。II. 「“身近な”協同(協働)によるまちづくりをめざして」(牛田清博)は、「身近な協同」の形成が安心して暮らしつづけられる地域づくりのためには不可欠であるとの認識から、そこに生協の使命をすえてた論考を進める。III. 「組織の変化と今後の生協のあり方」(森下智)は、コープみえ(2003年県内4生協による合併)の組織の変化とそれらに対応する生協事業・活動の取り組みの紹介である。班購入から個人利用中心の共同購入事業へのシフトは時代の流れであるが、実践的には明確な加入動機が見えづらくなっているという指摘は考えさせられる。IV. 「生協運動に夢とロマンを」(河原洋之)は、「夢とロマン」を持てるような生協であってほしいという願いからの発信である。ただし、毎日が必死の職員にとってはなかなかそれを実感する契機はなかった、と筆者はいう。では、如

何にして「夢とロマン」を実感し、自ら語れる言葉として獲得していったのだろうか。それは、組合員参画の力を実感するプロセスの中にあった。支えー支えられる関係と信頼に基づいた協同は変わらぬ価値として持ち続けていくことの大切さをあらためて教えられた。V. 「『地域・社会的生活協同組合』をめざして」(向井忍)では、レイドロー報告(1980年)に照らして地域と社会に根ざす生協の今日的到達点および課題を明らかにしている。中でも、モノ不足、灯油の出荷制限の中で限られた商品を如何に分け合うかを話し合った経験を通して組合員参加と対話の重要性を身体化していくプロセスからは、形は異なりながらも現代に通じる協同組合の根幹にある思想を読み取ることができる。

地域に根を張る協同組合の文化

本書では補論として「協同組合と文化ー「協同組合の文化」考ー」(中川雄一郎)が掲載されている。協同組合の文化とは何かという問いを立て、社会的・歴史的・イデオロギー的、そして理念的な価値(観)という観点から、協同組合の文化の淵源を探ろうと試みるその考察は筆者の壮大な思索と知的探求の賜物であり、一言でコメントすることは難しい。しかし、歴史的に「協同組合の理念と実践の統合」によって生み出されてきた実体(substance)としての社会的利益が多く、構成員によって蓄積されてきた実在が協同の文化と呼ぶものであると考えれば、本書の試みもまた協同組合の文化として結実したものであるといえるのではなかろうか。

本書を通読して、第3章で引用されている「『希望』とは苦しみの中を歩み続ける中から生まれてくるのかもしない」という野本三吉の言葉が心に残った。東海の実践が、そして全国各地で真剣に安心して暮らせる地域や社会の創造に向けて「歩み続ける中から生まれ」てきたものが「文化」となり、希望の拠り所として協同組合が輝きを放つ未来に思いを巡らせた。